

… はなの村の四季 …

正月飾りにふさわしい南天(なんてん)の赤い実(実南天)

小 関 栄

冬の日、あたりはほとんどが落葉しているのに南天だけは、緑の葉の上に真っ赤な実をたくさん付け彩っている。わが家の界限には以前から、あちらこちらに自生している。

南天は6月から7月にかけて白い小花が咲き、それが結実して晩秋から冬にかけて、鮮やかな真っ赤な実になる。

ほかの木の間に生えることが多くて、それほど気附かない地味な木、幹は捻じれて細く竹のようにひょろひょろと伸びるが背は低く、その先に傘を広げたような枝の間に、花を咲かせ実になる。この木は花よりも真っ赤な実が特徴、実南天または なんてんのみ 上写真 なんてん はわが家の裏庭の実南天1/5撮影南天実と云って愛されている。つぶらに熟れた赤い実は、花の乏しくなった正月は、葉とともに色々な飾りに用いられる。花言葉も「福をなす」「良き家庭」と縁起が良い。季語は晩秋。



この写真は 26. 7. 3. 撮影の庭の南天の花

この実はアルカロイドを含み、せき止めなどの薬に用いている。中国では実を天竺子(tianzhuzi)という。実ばかりでなく葉も幹も毒性がある為か不浄除けとして便所の近くに植えられ、この葉で手を清めるのを南天手水という。

南天の木の原産は名前の通り中国南西部の温暖地に広く自生、南天竹(nantianzhu)ともいう。

枯木の間 つぶらに熟れた 実南天 淡水

新刊紹介

二宮尊徳の教え「報徳」とそれを広めた人たち

小関 栄 著

「はなの村だより」に毎号欠かさずエッセー「花のむらの四季」を寄稿しておられる学園はなの村顧問の小関栄さんが、この度 二宮尊徳の教え「報徳」と それを広めた人たち を出版されました。

この本はこれまで、学問の師はいないとされてきた二宮尊徳が、何をどのように学び「報徳」と言われる思想を形作ったかを読者が納得いくよう丁寧に解説しています。

それだけでなく、四海混迷の江戸末期、尊徳の語る報徳思想を直接尊徳に学び、その内容を実践した22人の著作を通して紹介するという大変な労作です。

最新の報徳研究成果も踏まえた内容は、きっと読者を喜ばせる事でしょう。「尊徳を取りまく報徳の語り部」の伝えるものをしっかり受け止めようと著者は呼びかけているのだと思います。

高校時代からの友人野口幹夫さん(学園はなの村創設時から私達の活動を支援)は、昨年私達の勉強会で講師小関さんがレポートされた「尊徳の弟子たち」に、「現代人として考えさせられる点多々あり」との読後感を寄せてくれました。この会報の別紙として同封お送りしますので、併せご一読ください。皆様のご感想をお待ちいたします。 学園はなの村 伊藤公博

頒価 : 1,400円 (消費税別)

お求め先: 大日本報徳社 〒436-0079 掛川市掛川 1176 電話 0537 (22) 3016
: 報徳博物館 〒250-0013 小田原市南町 1-5-72 電話 0465 (23) 1151